

都美セレクション グループ展 2024

Group Show of Contemporary Artists 2024

Gallery A

ステイル・エコー：境界の風景

Still Echo - Border Landscapes

Gallery B

ずれはからずもぶれ

Unforeseen Deviations

Gallery C

回遊する風景

Migratory Landscapes

ごあいさつ

「都美セレクション グループ展」は、新しい発想によるアートづくり手たちによるグループ活動支援を目的として、展覧会企画を広く一般に公募し、審査により選抜されたグループが実施するものです。

13回目の開催となるグループ展 2024には17件の応募があり、書類審査とプレゼンテーション審査を経て、3グループが選出されました。審査にあたっては、東京都美術館の場所性、ギャラリーA・B・Cという個性的な空間を活かした企画である点が重視され、各グループは約8か月をかけて、それぞれ個性的な展覧会を実現させました。

本書では、展覧会の会場風景の記録と開催実績を、審査委員講評とあわせてご報告します。参加いただいた3グループの皆さまをはじめ、本展実施にご協力いただきました関係各位に、心より御礼申し上げます。

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館

- 3 実施概要
- 4 境界、移動、風景 —— 「都美セレクション グループ展 2024」について
瀧良介
- 6 **スティル・エコー：境界の風景**
「スティル・エコー」展実行委員会
- 19 「スティル・エコー：境界の風景」展について
野地耕一郎
- 20 **ずれはからずもぶれ**
ずれはからずもぶれ実行委員会
- 33 「ブレ」の細部に肉声を聴く
山村仁志
- 34 **回遊する風景**
回遊する風景実行委員会
- 47 「回遊する風景」を見て
光田由里

凡例

- ・グループによる展覧会紹介、作品リスト、作品配置図、関連事業報告は、各グループから提供されたテキスト及びデータに基づく。
- ・各グループのメンバーのうち、代表者の氏名の後ろに*をつけた。

実施概要

都美セレクション グループ展 2024

Group Show of Contemporary Artists 2024

企画公募期間

2023年1月19日(木)～5月12日(金)

応募件数

17件

審査委員

野地耕一郎(泉屋博古館東京館長)
光田由里(多摩美術大学教授)
山村仁志(東京都美術館学芸担当課長)

※役職は審査会当時

実施グループ

ギャラリーA

展覧会名：スティル・エコー：境界の風景

グループ名：「スティル・エコー」展実行委員会(代表：稲宮康人)

ギャラリーB

展覧会名：ずれはからずもぶれ

グループ名：ずれはからずもぶれ実行委員会(代表：ユミソン)

ギャラリーC

展覧会名：回遊する風景

グループ名：回遊する風景実行委員会(代表：橋本トモコ)

展覧会概要

会期：2024年6月10日(月)～6月30日(日)(20日間)

会場：東京都美術館ギャラリーA、B、C

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館、
各展覧会の実施グループ

総入場者数：31,382名

担当：大内曜、瀧良介(東京都美術館学芸員)

主な掲載記事

- ・大内曜「うつりゆく人・うつりゆく風景」『東京都美術館ニュース』2024年3月31日
- ・「ずれはからずもぶれ展 「移動に自由はあるか」問う」『東洋経済日報』2024年6月14日
- ・高橋咲子「展覧会 スティル・エコー：境界の風景 日本の輪郭をたどる」『毎日新聞』2024年6月24日
- ・飯沢耕太郎「写真遊歩—眼から眼へ(2024年5～7月)」『artscape』2024年6月25日



チラシ(デザイン：森垣賢)

境界、移動、風景 —— 「都美セクション グループ展 2024」について

瀧良介（東京都美術館学芸員）

「都美セクション グループ展」は、東京都美術館の展示の中でもより挑戦的な試みに開かれた、企画公募型の展覧会である。第13回目となる今回は、「スタイル・エコー：境界の風景」「ずれはからずもぶれ」「回遊する風景」の3企画が選出された。いずれも参加作家各人の関心と全体のコンセプトが噛み合った、刺激のかつ説得力のある展示となった。以下では、担当学芸員の立場から各展示の概要を振り返る。

「スタイル・エコー：境界の風景」（ギャラリーA）は、近現代史を通じて日本と近隣諸国との狭間に形成された、「境界」の風景の残存と変容を主題とする展覧会。稲宮康人、新田樹、笹岡啓子の3名の写真家と、批評家・キュレーターの小原真史が参加した。稲宮は、大日本帝国の版図の拡大に伴って東アジアや南洋地域の各地に建てられた、「海外神社」の痕跡を丹念に辿った。一方、新田が細やかに写しとったのは、日本統治下の旧樺太に住むことを余儀なくされ、戦後もこの地に留まらざるを得なかった、サハリンの残留韓国・朝鮮人たちが日々を生きる姿である。2人の作品は、国境が移動する中で埋もれてしまう土地や人の記憶を鮮やかに可視化し、歴史の忘却作用に抵抗した。

揺れ動くのは政治的境界ばかりではない。日本各地の海岸線や山の稜線を写す笹岡の《SHORELINE》シリーズは、「国土」を限界づける自然の境界もまた刻々とその姿を変えていることを示した。同シリーズには、東日本大震災の被災沿岸地域に公園やモニュメントが建ち、慰霊と復興のための場として再編成されていく過程も収められる。目の前で少しずつ堆積してゆく出来事の地層を静かに記録する笹岡の作品もま

た、移ろいやすい人間の記憶からこぼれ落ちるものをすくい取ろうとする姿勢に貫かれていた。

小原は、自ら収集した近代日本の博覧会に関する豊富な資料を3人の作品に関連させつつ提示することで、植民地主義の推進装置としての博覧会という、もう1つの視点を本展に導入した。東京都美術館のあるここ上野公園は、かつて官製の「エキシビジョン・パーク」として、日本の対外膨張を正当化し祝福する役目を果たした。当館の前身である東京府美術館にも、「大東亜戦争美術展」（昭和17、18年）のような国威発揚のための展覧会の会場となった過去がある。小原の資料展示には、この東京府美術館時代にゆかりのある展示ケースが用いられ、会場にも過去の残響がかすかにこだましていた。

「ずれはからずもぶれ」（ギャラリーB）には、国境を越え世界各地で活動する作家たちが集い、「移動」をテーマに、異なる共同体に身を置くことで経験する「ずれ」や「ぶれ」に触発された作品を展示した。企画者のユミソンは、在日韓国人としての立場から、現代日本における「移民」の表象に鋭く疑問を投げかけた。同じく在日韓国人として長野県で育ち、現在は韓国で暮らすハ・ジョンナムは、和紙と韓紙を貼り合わせ、そこに、複数の文化を渡り歩き生きることの困難と喜びを刻んだ。一方、ベルリンを拠点に活動する近藤愛助は、黄禍論の吹き荒ぶ20世紀初頭のアメリカで移民として暮らした曾祖父の記憶を辿った。《Diaspora Memories》は、曾祖父の遺品や現地のアーカイブに残された古写真に映る当時の風景を現在のそれに重ね合わせる試みである。写真の中には、かつて存在した日系人強制収容所のほか、海の向こうの「エキシビジョン・

パーク」であるゴールデン・ゲート・パークの日本庭園の姿も映る。

イシャイ・ガルバッシュは、分断と領土化という境界のもっともハードな側面に正面から向き合った。《Seagull migration》は、韓国と北朝鮮の間の海上境界線付近をカモメが行き交う様子を映し、人の移動の不自由さを浮彫りにする映像作品。大型の写真パネルでは、ヨルダン川西岸地区に彼女の母国でもあるイスラエルが設けた、世界で最も有名な分離壁の姿を提示した。他方、アリサ・ベルゲルは、ロシアと国境を接するウクライナ東部のドンバス地方出身の青年が、VR技術を通じて仮想的に帰郷を果たす様子を映像化した。こうした世界各地の現在進行形の分断を映し出す作品の傍ら、イスタンブール在住のイレン・トクが徳島県神山町で制作した《酒ラバーズ》は、移動がもたらすセレンディピティに静かに光をあてた。また、編集者・作家として自らジャンルの横断を実践してきた吉川浩満は、越境者のための道しるべとなる「書物の星座」を編んだ。

「回遊する風景」（ギャラリーC）においても、移動や旅が作家にとって意味するものの大きさが随所で示された。本展に参加した5人の作家たちは、風景や自然の認識にまつわる個人的な記憶や身体的体験を突き詰めつつ、それを他者と共有する可能性を模索してきた。高い天井を有する回廊部で作品を展示したのは、吉田さとし、橋本トモコ、向井三郎の3人。吉田の連作は、刺繍でなぞった震える線から立ち上がる尖塔の群れが印象的な《その街の地図(5)》など、幼少期に住んでいたヨーロッパで描いた街の景色を様々な手法で再現した。つづく橋本は、スイスの

パーゼルを流れるピルス川の眺めに感銘を受けた体験を起点に、「隙間の光」と称して、木々をとおして見る風景の新たな表現を追究した。向井は、幾日も海岸に通って制作したという、木炭のみで描かれた高さのある2点の大型の海景画を展示した。変化に富む波の幻惑的な効果や、畝のように積み上がる海面の明暗など、見ることと描くことの往復で研ぎ澄まされた表現が存在感を示した。

反対側の低天井の部屋には、和田みつひととバックランド美紀による写真作品が並んだ。和田は、湿潤な大気に包まれた人気のない自然の景色をループ・スライドとパネルで提示した。ゆっくりとオーヴァーラップしながら移り変わる自然のイメージは、生と死、生成と消滅といった普遍的テーマについての思索を誘うようでもあった。パーゼル在住のバックランドの写真は、スイス・アルプスの雪化粧など、自然の艶やかなテクスチャを静謐な空気感の中で捉えた。緻密に制御された光のもとで花の色や輪郭を際立たせた一連の小型作品は、ハイパーリアリズムの静物画のような佇まいを見せていた。

今回展示を行った3つのグループは、それぞれ主題やアプローチを異にしながらも、「境界」や「移動」、「風景」といったキーワードを共有することで、各々の長所を際立たせ、互いの視点を補完しあっていた。こうした相乗効果が起こるのも、「都美セクション グループ展」の醍醐味の1つと言える。今回の展覧会が、参加作家たちの次なる飛躍の一助となることを願う。

展覧会名

スタイル・エコー：境界の風景

Still Echo - Border Landscapes

グループ名

「スタイル・エコー」展実行委員会

Still Echoes

助成

公益財団法人 朝日新聞文化財団

入場者数

10,258名

メンバー

稲宮康人*	Yasuto Inamiya*
笹岡啓子	Keiko Sasaoka
新田樹	Tatsuru Nitta
小原真史	Masashi Kohara

グループによる展覧会紹介

本展は明治期に帝国主義国として船出した日本がその版図を東アジアに拡大したことにより出現した境界をテーマにした。国家の境界は時代とともに変容し、その度に国家と国家の谷間に取り残されたような風景や人々が生まれてきた。

近現代におけるそうした境界やモニュメンタルな場所の在り様を注視してきた3名の写真家の作品が並ぶ壁と相対する形で展示されたのは、日本の「内地」と「外地」で開催された博覧会についての資料だ。これらの博覧会に林立してい

た植民地パビリオンは、3名の写真家たちの撮影地や関心とどこかで繋がっている。そして他ならぬ上野こそ、明治以降、数多の博覧会が開催され、近代日本のショーケースとなってきた「エキシビション・パーク」と呼べる場所だろう。その意味で、上野で開催された本展では、内地と外地、過去と現在を結び、地続きのものとして捉え直そうとした。言い換えれば、過去からの残響に耳を澄ませ、「いま・ここ」で応答する試みとなったのではないだろうか。

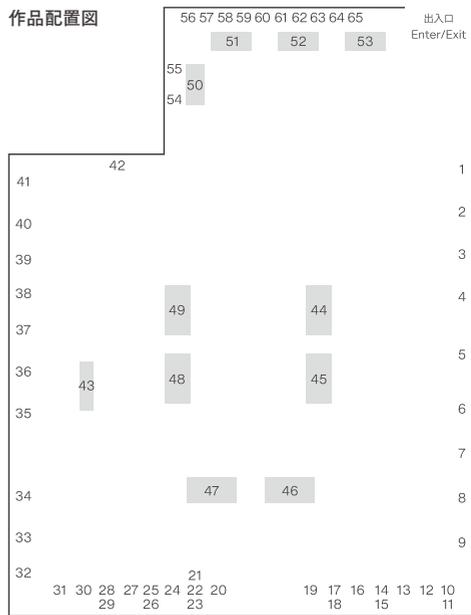




稲宮康人 《海外神社》シリーズより	9 樺太神社跡(現・山林) ロシア・ユジノサハリンスク 2009年 発色現像方式印画 100×90 cm 神奈川大学寄託
1 台中神社跡(現・台中公園) 台湾・台中市 2009年 発色現像方式印画 100×90 cm 神奈川大学寄託	新田樹 《Sakhalin》シリーズより
2 建国忠霊廟跡(現・文物保護単位) 中国・長春市 2012年 発色現像方式印画 100×90 cm 神奈川大学寄託	10 金公珠さん 国民学校高等科の頃、 同級生の目黒千絵さんと ユジノサハリンスク(旧豊原) 2010年 発色現像方式印画 43×35.6 cm 作家蔵
3 南興神社跡(現・マウントカームル 教会) アメリカ・サイパン島 2015年 発色現像方式印画 100×90 cm 神奈川大学寄託	11 出会った頃の金公珠さん ユジノサハリンスク(旧豊原) 2010年 発色現像方式印画 43×35.6 cm 作家蔵
4 朝鮮神宮跡(現・南山公園) 韓国・ソウル特別市 2009年 発色現像方式印画 100×90 cm 神奈川大学寄託	12 金公珠さん84歳の誕生日 ユジノサハリンスク(旧豊原) 2011年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵
5 海外神社動画 2024年 プロジェクト 6分40秒	13 ブイコフ(旧内淵) 2011年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵
6 汕頭神社跡(現・汕頭文化館) 中国・汕頭市 2015年 発色現像方式印画 100×90 cm 神奈川大学寄託	14 金公珠さん ユジノサハリンスク (旧豊原) 2011年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵
7 光州神社跡(現・光州公園) 韓国・光州広域市 2010年 発色現像方式印画 100×90 cm 神奈川大学寄託	15 ザゴルスク(旧西内淵) 2011年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵
8 平安神宮 日本・京都市 2009年 発色現像方式印画 100×90 cm 神奈川大学寄託	16 ジーナさんとリョーニャ君 金公珠 さんの三女とひ孫(ウラジクの長男) ユジノサハリンスク(旧豊原) 2014年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵

17 浜塔路 シャフチョルスク(旧塔路) 2014年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	22 李富子さんと崔雲鳥さん ドーリングスク(旧落合) 2018年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵
18 シャフチョルスク(旧塔路) 2014年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	23 日本統治時代の忠霊碑 シャフチョルスク(旧塔路) 2014年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵
19 ウラジクの長女レーナさん(公珠さん のひ孫) ユジノサハリンスク(旧豊原) 2014年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	24 李富子さん ブイコフ(旧内淵) 2016年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵
20 李富子さん ブイコフ(旧内淵) 2014年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	25 旧日本軍第88師団跡 レオニドボ(旧上敷香) 2016年 発色現像方式印画 43×35.6 cm 作家蔵
21 旧東白浦神社跡 プズモリエ(旧白浦) 2016年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	

作品配置図

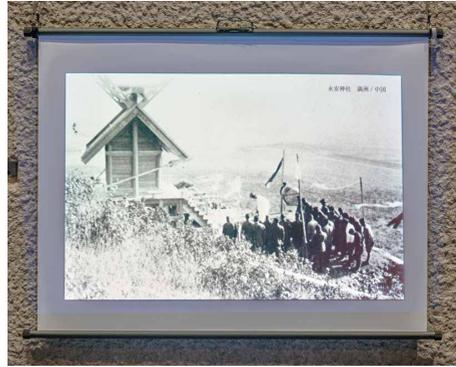


26 診療所の依頼で医療用の時計 (ソ連時代の物)を修理するサーシャ ブイコフ(旧内淵) 2017年 発色現像方式印画 43×35.6 cm 作家蔵	34 辺戸岬、沖繩 2011年 インクジェット・プリント 100×76.5 cm 作家蔵
27 旧王子製紙株式会社知取工場 マカロフ(旧知取) 2017年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	35 白間津海岸、千葉 2019年 インクジェット・プリント 100×76.5 cm 作家蔵
28 李富子さん ブイコフ(旧内淵) 2017年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	36 荒崎海岸、沖繩 2011年 インクジェット・プリント 100×76.5 cm 作家蔵
29 旧知取川 マカロフ(旧知取) 2018年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	37 種差海岸、青森 2012年 インクジェット・プリント 100×76.5 cm 作家蔵
30 旧牧場の沢 太平洋戦争末期、樺太 で暮らす外国人の居留地がこの地に 造られた カメネツカヤ(旧富内村) 2018年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	38 あさり浜海岸、北海道 2010年 インクジェット・プリント 75×75 cm 作家蔵
31 歌う富子さん ドーリングスク(旧落合) 2018年 発色現像方式印画 61×50.5 cm 作家蔵	39 襟裳岬、北海道 2010年 インクジェット・プリント 75×75 cm 作家蔵
32 龍飛崎、青森 2001年 インクジェット・プリント 75×75 cm 作家蔵	40 雄冬岬、北海道 2018年 インクジェット・プリント 100×76.5 cm 作家蔵
33 茶白岳、栃木 2019年 インクジェット・プリント 100×76.5 cm 作家蔵	41 旭岳、北海道 2012年 インクジェット・プリント 100×76.5 cm 作家蔵
32 31 30 28 27 25 24 22 20 29 26 23	42 The World After 2024年 プロジェクト 11分
31 30 28 27 25 24 22 20 29 26 23	43 "【Remembrance】1-41 【SHORELINE】1-45 【Park】1-7" 2012年-2024年 印刷物(ブックレット) 各B5/B2判

小原真史所蔵資料(44~65)	56 河鍋曉斎 「東京名所之内 上野山内一覽之図」 1881年 木版画
44 博覧会資料 「外地・内地を見せる博覧会」 絵葉書・パンフレット等	57 小林年参 「上野公園博覧会場 美術館々噴 水器之図」 1881年 木版画
45 博覧会資料 「外地・内地を見せる博覧会」 絵葉書・パンフレット等	58 楊齋延一 「第三回博覧会図」 1890年 木版画
46 博覧会資料 「新領土と拓殖」 絵葉書・パンフレット等	59 英斎 「上野第三回内国勸業博覧会 御幸 之図」 1890年 木版画
47 博覧会資料 「新領土と拓殖」 絵葉書・パンフレット等	60 網島亀吉 東京勸業博覧会第一会場イルミ ネーション之光景」 1907年 石版画
48 博覧会資料 「復興と地方博覧会」 絵葉書・パンフレット等	61 作者不詳 「東京上野博覧会夜景全図」 1907年 石版画
49 博覧会資料 「復興と地方博覧会」 絵葉書・パンフレット等	62 作者不詳 「東京大正博覧会第二会場光景」 1914年 石版画
50 博覧会資料 「上野山と博覧会」 絵葉書・パンフレット等	63 作者不詳 「東京大正博覧会不忍池畔第二会 場之光景」 1914年 木版画
51 博覧会資料 「上野山と博覧会」 絵葉書・パンフレット等	64 作者不詳 「平和記念東京博覧会」 1922年 印刷物
52 博覧会資料 「上野山と博覧会」 絵葉書・パンフレット等	65 潮野覚城 「大礼記念国産振興 東京博覧会 鳥瞰図」 1928年 印刷物



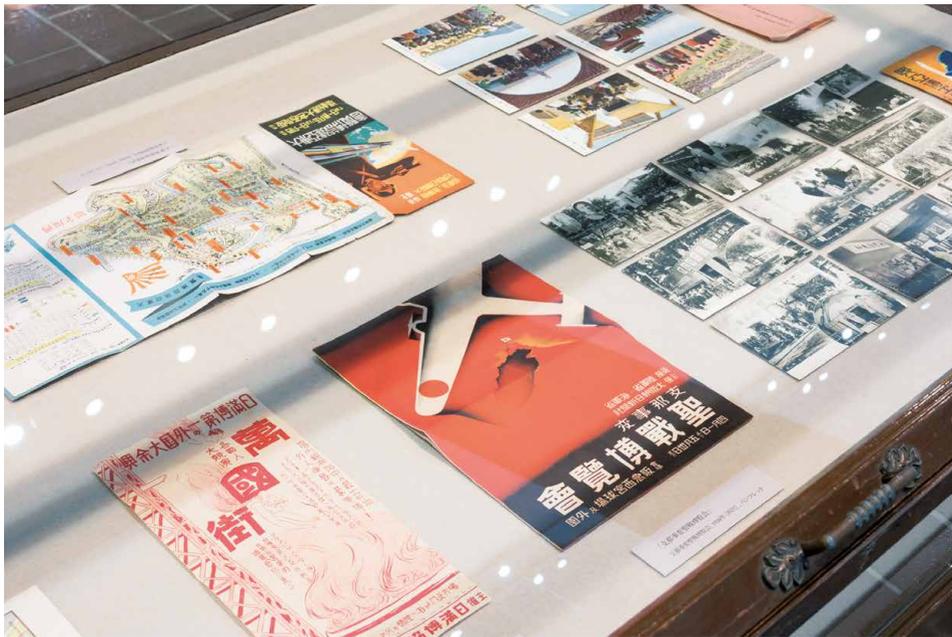
稲宮康人《台中神社跡(現・台中公園)台湾・台中市》



稲宮康人《海外神社動画》(部分)



新田樹《Sakhain》シリーズより(部分)



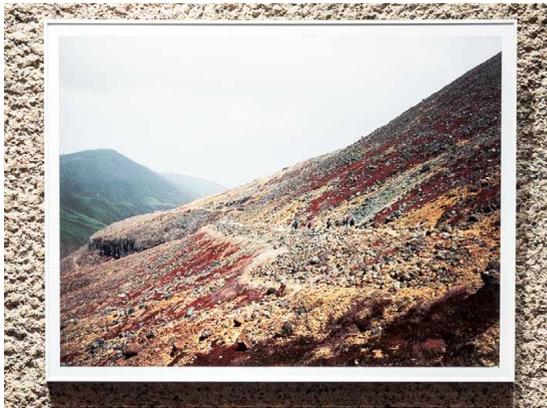
小原真史所蔵 博覧会資料「外地・内地を見せる博覧会」(部分)



小原真史所蔵 博覧会資料「新領土と拓殖」(部分)



小原真史所蔵 博覧会資料「復興と地方博覧会」(部分)



笹岡啓子《茶臼岳、栃木》



笹岡啓子
"『Remembrance』1-41、『SHORELINE』1-45、
『Park』1-7" (部分)



小原真史所蔵 博覧会資料「復興と地方博覧会」(部分)



小原真史所蔵 博覧会資料「上野山と博覧会」(部分)



小原真史所蔵 博覧会資料「上野山と博覧会」(部分)

出展者によるギャラリートーク

日時：6月23日(日)14:00-
会場：東京都美術館 ギャラリーA
参加人数：65名

出展した3名の写真家とキュレーターによるリレー形式のトークイベント。
「植民／殖民」とモノメンタルな場所としての公園がテーマとなった。



「スティル・エコー：境界の風景」展について

野地耕一郎(泉屋博物館東京館長)

宗主国と植民地。あるいは中心と周辺。その関係性のなかでの加害と被害について改めて考えなければならないことを、この展示は我々に突き付けた。加害被害の構図は明らかだが、それだけで割り切れない無数の属性と主体性がかつての日本帝国の下で交錯していたばかりか、それは敗戦後の偽装平和と呼べる復興事業や原発行政などによる周辺地域への押し付けがまねいた社会構造にまで入り乱れていることを示唆していた。

戦前、帝国日本が植民地化した場所には、ほぼ必ず「海外(植民地)神社」が存在したことは知っていたが、現在それがどのようなものか稲宮康人の写真は示す。

日清戦争後に創建された台湾神社をはじめ、樺太神社や朝鮮神宮、満州から南洋パラオまで第二次世界大戦時まで約1700社余りの海外神社が存在していた。それらの神社は、地域鎮護と同時に支配の視線を確保するものでもあったから、各都市周辺部の山稜に置かれたことが写真からも分かる。外地人は縁もゆかりもない内地神を強制的に参拝させられたから、従って敗戦とともに海外神社は真っ先に襲撃された。打ち壊された神社は、見晴らしの良さを利用して自治体による別施設に改変され、あるいは残骸化した石造鳥居などは公園の遊具の一部になったり、または見捨てられたまま森林草地に浸食される運命をたどったことが写真に写し撮られている。

見捨てられたのは場所だけではない。帝国化によって「日本人」に包摂された(一部は排除された)アジア周辺の人々の中には、敗戦後サハリンに取り残され日本国籍を失った朝鮮半島出身者もいた。新田樹の写真作品は、歴史に翻弄された

人々がソ連(ロシア)領となった地で営んできた暮らしや消えることのない日本領だった痕跡を写し出して、観る者の視線を揺さぶる。

また、笹岡啓子の写真は、固定化した地図より実際の国土の境界線は揺れ動いていること、そして東日本大震災後に被災地に造られたモノメンタルな公園が忘却と記憶とがせめぎあう渚のような場所となっていることを示す。

以上三者の写真を日帝時代と関連付けて見せていたのが小原真史の博覧会コレクションだ。植民地に限らず、戦前の日本帝国の諸都市で行われた最大のイベントが、各種博覧会だった。植民地都市での博覧会の意味は、いうまでもなく「外地の内地化」への意識を植え付けるためだったから、博覧会そのものの意味よりも、むしろ内地(日本)からの視点を中心だったことが分かる。国内博覧会では植民地の「野蛮」を強調した見世物といった内容だが、逆に植民地博覧会では日本帝国の「近代化」を強く印象づけるものばかりが開催された。だから開催美術館や博物館が政治的な場でもあることを、祝祭的なポスターやパンフ資料の数々が伝えている。

その中で、注意を引いたのが地図だ。それは、世界のいっさいの存在を可視化し統治できると自負する権力の産物だが、逆に言うと、博覧会にせよ神社建設にせよ、この時代に東アジアで孤立化の道を選択した日本が、より一層帝国内で「国民統合」の必要性に迫られていたことの裏返しでもあろう。

本展は、日本の周辺地域で起きた人々の移動や建造物がたどった軌跡を見つめ直すことで、支配と権力の道具だった不正義の地図を描き直すことを促すものだ。その視座を問いかける声が冷静なだけに、胸と腹に重く応えた。

展覧会名

ずれはからずもぶれ

Unforeseen Deviations

グループ名

ずれはからずもぶれ実行委員会

Group of Unforeseen Deviations

助成

公益財団法人 朝日新聞文化財団

NOT SO BAD, LLC

金子千裕





入場者数

9,697名

メンバー

アリサ・ベルゲル	Alisa Berger
イシャイ・ガルバッシュ	Yishay Garbasz
イレントク	Irem Tok
近藤愛助	Aisuke Kondo
ハ・ジョンナム	Jhon-nam Ha
吉川浩満	Hiromitsu Yoshikawa
ユミソン*	Yumi Song*





グループによる展覧会紹介

本展覧会は主にディアスポラのアーティストたちによる展覧会であるが、ファミリーのルーツを追うのが主眼の展示ではない。身体的な移動だけではなく思想や思考、内的な移動も視野に入れる。

「移動、はたしてそれは自由を意味するのか？」近藤愛助の曾祖父は米国の日系人収容所に収容され、イシャイ・ガルバッシュの母はナチスドイツに連行されドイツ各地の収容所を巡った。アリサ・ベルゲルは日帝時代に朝鮮を逃れた母方とユダヤ系の父方と共に移動を繰り返し、ハ・ジョンナムは嫁入りとして日本から韓国へと渡った。

一方で、ユミソンは移民という大きな言葉の意味を問い、イレン・トクは知識の集積である本の中を物理的に旅する人々を描く。吉川浩満は膨大な書物の中の知識を横断しながら言葉をつむぐ。



イシャイ・ガルバシュ	7	吉川浩満
1 Seagull migration, Hani Beach, Baengnyeongdo 2014年 シングルチャンネルビデオ	Reconstruction of Ansel Adams's Photographs of Japanese-American Incarceration at Manzanar-1 2014年, 2020年 昇華転写プリント	11 「ずれはからずもぶれ」のための書物の星座 2024年 選書
2 Wall separating the Al-Quds University 2004年 タイプCプリント	8 Memories of Diasporas 2024年 写真	12 よく見えない 制作年不明 エッチングの版
イレン・トク(イレーム・トウオク)	アリサ・ベルゲル	13 ホームレスの振る舞いは「移民」のそれ 2020年 革のブックカバー
3 酒ラバーズ 2018年 古文書、ジオラマ	9 RAPTURE I-VISIT 2024年 4K ステレオサウンド カラー 19分22秒	14 普段なら「ない」ものとして見過ごされる彼ら 2024年 フェルトに刺繍、クレヨン
ハ・ジョンナム	10 Одеяло (ブランケット) 2024年 データモッシュしたビデオの静止画をコットンに プリント、ソビエト連邦と日本(サテン、シルク、コ ットン、ビスコース)の生地、ダウン充填、ソビエト連 邦の糸で縫製	15 移民の肉体労働者として働く 2024年 バッグ
4 模様23-24 2024年 ウォンジュ韓紙、アンドン韓紙、松崎和紙、 割竹、木材		

近藤愛助

5
A picture you might have drawn #1,
#4, #7, #10, #11, #18, #19, #24
2024年
紙にオイルパステル

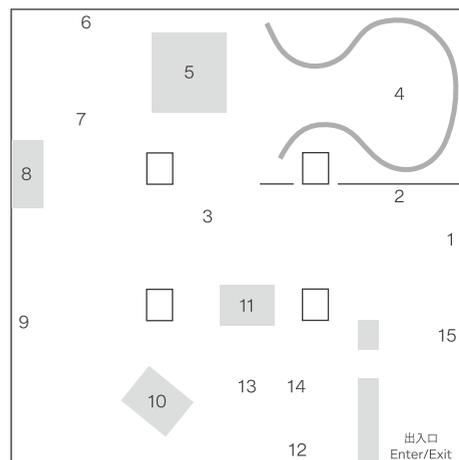
6
三つの映像作品

YELLOW PEEL (Revised First
Edition)
2023年
シングルチャンネルビデオ
13分20秒

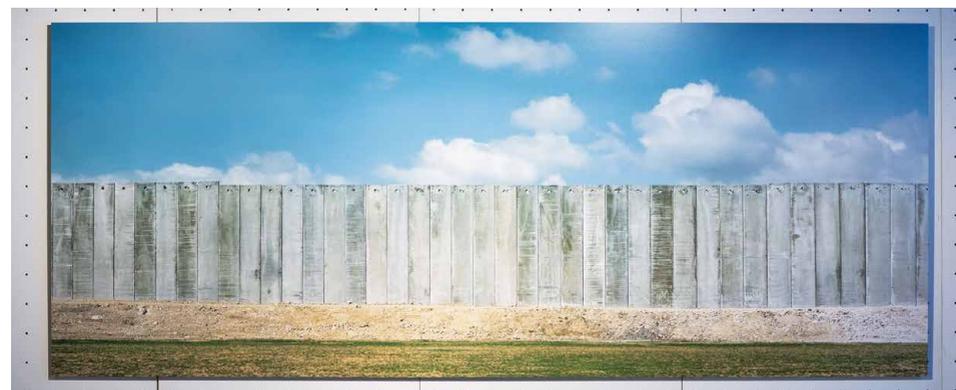
A picture you might have drawn
2024年
シングルチャンネルビデオ
5分24秒

Diaspora Memories
2021年
シングルチャンネルビデオ
19分41秒

作品配置図



イシャイ・ガルバッシュ



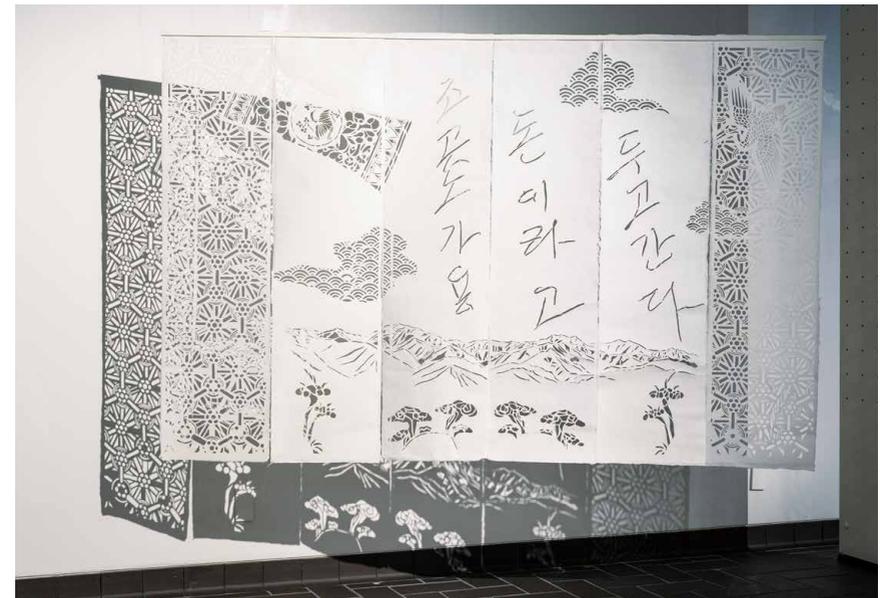
上・左《Wall separating the Al-Quds University》
上・右《Seagull migration, Hani Beach, Baengnyeongdo》
下《Wall separating the Al-Quds University》

イレン・トク



上《酒ラバース》、下《酒ラバース》(部分)

ハ・ジョンナム



上《模様23-24》、下《模様23-24》(部分)

近藤愛助

アリサ・ベルゲル

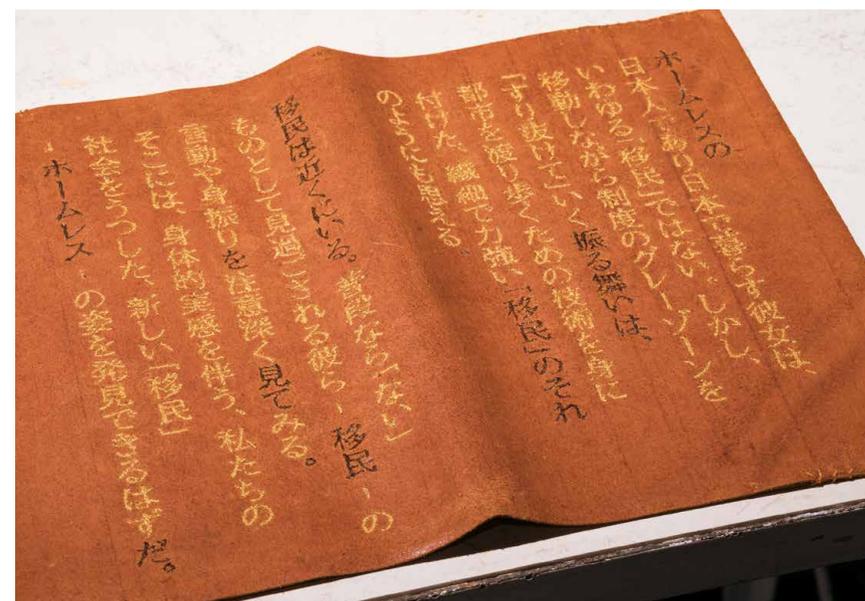
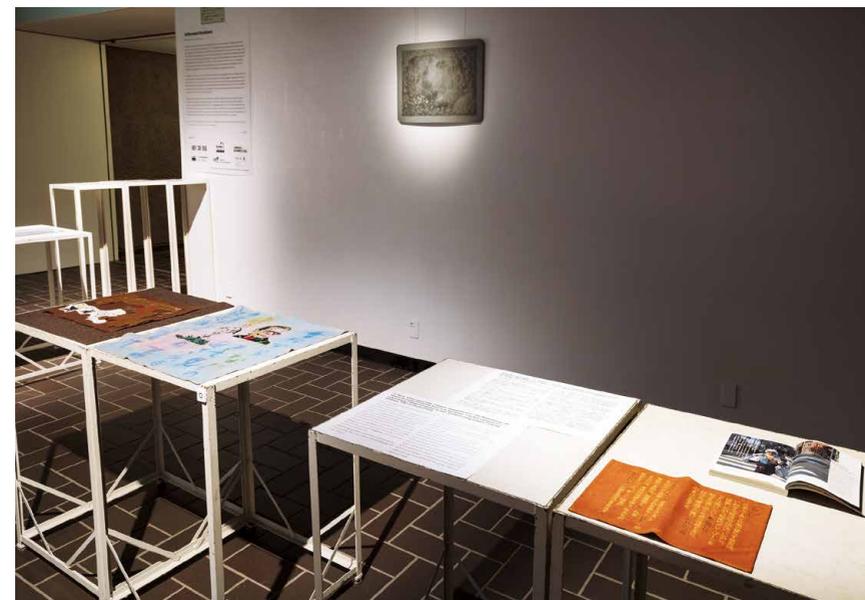


上・左《Reconstruction of Ansel Adams's Photographs of Japanese-American Incarceration at Manzanar-1》
 上・右《三つの映像作品》(部分)、上・手前《A picture you might have drawn》(部分)
 下《Memories of Diasporas》(部分)

上・奥《RAPTURE I-VISIT》(部分)、上・手前《Одеяло (ブランケット)》
 下《Одеяло (ブランケット)》(部分)

吉川浩満

ユミソン



上《「ずれはからずもぶれ」のための書物の星座》
下《「ずれはからずもぶれ」のための書物の星座》(部分)

上・奥《よく見えない》、上・手前左《普段なら「ない」ものとして見過ごされる彼ら》、上・手前右《ホームレスの振る舞いは「移民」のそれ》
下《ホームレスの振る舞いは「移民」のそれ》(部分)

ハ・ジョンナムの観客とつくるパフォーマンス

私が誰だかわかりますか？
あなたは誰でしょう？

音を鳴らす人：馨子
日時：6月15日(土)15:00-
会場：東京都美術館 スタジオ
参加人数：30名



最初に歌ったのは、在日朝鮮人の作曲家が作った「故郷よ(고향야)」です。この歌は、日本に来て故郷に戻れなくなった在日朝鮮の人が自分の故郷を思いながら作った歌です。それなのに、私が結婚して2017年、韓国に来た当初、なぜか自然とこの歌が頭に流れ出しました。そして浮かんだ景色は生まれ育った長野県の信濃大町の山の風景でした。その時に、自分の祖国は祖

国でも、生まれ育った故郷は忘れる事ができないと思いました。私は、それまでに数万回と私のアイデンティティについて考えておりました。が、しかし、韓国に移住し、2週間経った時、やっと初めて自分自身が何者かについて、再認識をしたように思えます。今日、私の行った質問が、みなさんの中の深い部分に届くようなそんな質問になれば良いと思いました。(ハ・ジョンナム)

吉川浩満の哲学対話

移動と移行、偶然をめぐって——哲学対話

ファシリテーション：永井玲衣
日時：6月15日(土)10:00- / 6月29日(土)10:00-
参加人数：21名 / 24名



哲学対話は円になって椅子に座り、皆で話合います。会話が始まる前に、集まった人たちが自己紹介をします。肩書きや職業などは要りません。その時だけ使う名前を決めます。なぜその名前を選んだのかを簡単に説明します。話したくない人は無理に話す必要はありません。対話で大切なのは話すよりも人の話をよく聞くことで

す。「移動」や「移行」がテーマであるこの哲学対話は、1人ずつ自分が考える「移動」や「移行」についての問いを出していきます。そこからゆっくりと興味のある問いについて話を進めていきました。この場でしか成り立たない話かもしれませんが、あとで大きな実を結ぶ話になるかもしれません。(ユミソン)

「ブレ」の細部に肉声を聴く

本展出品作家たちの生い立ちとアイデンティティは、様々な「ずれ」ている。彼らは、彼らでなければ表現し得ない現実のリアリティを作品に昇華させようと懸命につとめている。そのためには、方法論やモードではなく、作品のディテール(細部)、しかも彼らの人としての声が「図らずも」現れたところに注目する必要があるだろう。

近藤愛助は、曾祖父が第二次大戦中に収容されたアメリカの日系人強制収容所に係る映像作品3点、収容者を撮影したアンセル・アダムズの肖像写真を使ったバナー作品、曾祖父が撮った写真群、そして収容者の絵画を参照した自作のパステル画を出品した。ハ・ジョンナムは、韓紙と和紙を貼り合わせ、文字、文様、絵などを組み合わせた切り紙をいくつも天井から吊り下げた作品を展示。曾祖父の本籍地(韓国)と自分の故郷(長野県)を重ね合わせて、そのはざまで生きる自分を見つめる。本展の企画者であり、キュレーターでアーティストでもあるユミソンは、「よく見えない」エッチング、革やフェルトに刺繍したことば、そして縫製した色とりどりのバッグを展示している。刺繍された「移民は近くにいる。」という言葉が、文脈を離れて、物質的存在感があり、印象的だった。吉川浩満は、移動と移行を主題とする30冊以上の書籍を選書し、机に並べて入場者の閲覧用に供した。また会期中2回の「哲学対話」を主宰し、移動、移行をテーマに参加者に自ら思考する機会を提供した。

アリサ・ベルゲルは、ウクライナ人の友人でダンサー、マルコの故郷ドンバス地方のアパートの現在を再現した3D映像を本人に体験してもらい、その様子と彼のつぶやきと現地の映像を織り交ぜた作品を壁面に投影した。また、畳の上に置かれた布団状の作品《ブランケット》では、キルトにカラージュされた様々な国々の端切れ、そしてプリントされた家族の写真、ビデオの静止画、そして先

山村仁志(東京都美術館学芸員)

祖の物語の断片まで継ぎ合わせて美しいテキストイルにしている。イシャイ・ガルバッシュは、韓国ペンニョン島の海上にある38度線の境界をカモメが飛び交う静かな情景の映像作品と、エルサレムにあるパレスチナのアルクッズ大学近くにある巨大な灰色のコンクリートによる分断壁を撮影した大きな写真作品を出品している。2点とも非常に抑制的で、静謐かつミニマルであるにもかかわらず、圧倒的な存在感で分断の厳しい現実を露わにさせている。イレン・トクは、徳島県神山町の酒蔵で見つけた古文書をもとにした3点の小さなジオラマを出品している。《酒ラパーズ》と題していて、何らかの物語が隠されていると思うのだが、見ているだけでもユニークで、ユーモアと可憐さを感じられる。日本の山村の雰囲気がよく出ていると同時に、そのままの小石が巨大な岩に見え、木切れが赤土に、そして地層に見えてくる。

7人とも、それぞれの方法で共同体と共同体の間にある「ブレ」を見つめ、そこにある違和感を作品に籠めようとしている。しかし、往々にして、図らずも思いがけない「ブレ」が顔を出すのは、むしろ作品を見る方が感じ取る、おそらく作者でさえも気が付かなかったかもしれない細部の中である。例えば、アリサ・ベルゲルの《ブランケット》は、モノクロ番組とカラー番組が併存していた昭和40年代の古いテレビに映るブラウン管の映像を想い出させて、私には懐かしい。イシャイ・ガルバッシュの映像と写真は国家による分断の厳しさのみならず、海辺と青空の厳然とした美しさもまた強烈に記憶に残る。イレン・トクのジオラマをじっくり鑑賞していると、白ネクタイ姿の男が野原に座っているディテールがあるのに気が付いた。私にはそう見えるのだが、恐らくこの男は屋外で飲んで酷く酔っぱらっているものであり、彼の視界は「ブレて」いるのに違いない。

展覧会名

回遊する風景

Migratory Landscapes

グループ名

回遊する風景実行委員会

Migratory Landscapes exec. comm.

助成

NOMURA 野村財団

入場者数

11,427名

メンバー

企画	橋本トモコ*	Tomoko Hashimoto*
出品作家	バックランド美紀	Miki Buckland
	和田みつひと	Mitsuhiro Wada
	向井三郎	Saburo Mukai
	吉田さとし	Satoshi Yoshida
	橋本トモコ	Tomoko Hashimoto



グループによる展覧会紹介

誰もがスマートフォンを携帯し、日常の風景を手軽に撮影できるようになって何年過ぎただろうか。世界中の風景がSNSに乗り、私たちに届けられている。そのような大量の画像に囲まれて生活している今、私たちにとっての本当の「風景」は一体何だろうかという問いのもと、この展覧会を行った。

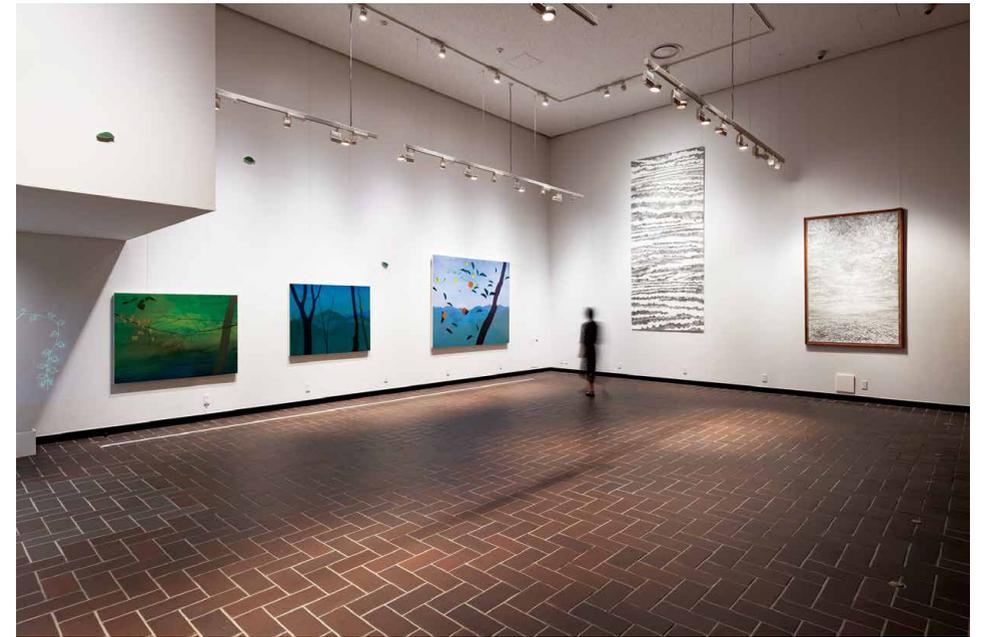
入口向かって左側の展示室は、和田みつひとのライド映像と写真作品、バックランド美紀の写真作品で構成した。眼前の事物を写した二人の作品からは、幻想的な風景が立ち上がって暗闇に浮かんだ。これと対照的に、明るく天井が高い右側の展示室は、絵画を中心とした作品で構成した。吉田さとの刺繍画とアクリル画、小さな陶作品を観ながら通路を進むと、橋本モコのライド映像と油彩作品のある空間に着く。最奥の正面には、向井三郎の木炭による大作品を配し、入口からそこに向かって山を登って行くような動線を作った。できるかぎり見えているままと捉えようとした絵画群からは、作者にとっての「風景」が実際の風景とパラレルワールドのごとく現れたように思う。

目に見えるものが真実とは限らない。私たちは真実を探す道中で、心の底から実感できる「風景」を求めている。鑑賞者が二つの展示室を回遊しながら、それぞれの「風景」を思い描いていただけたなら嬉しく思う。





撮影：坂田峰夫

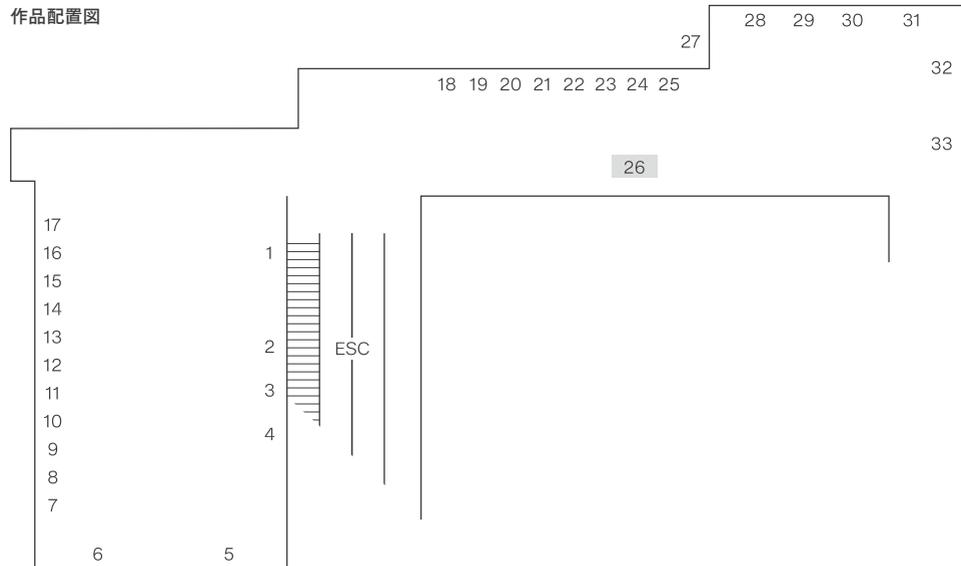


撮影：坂田峰夫

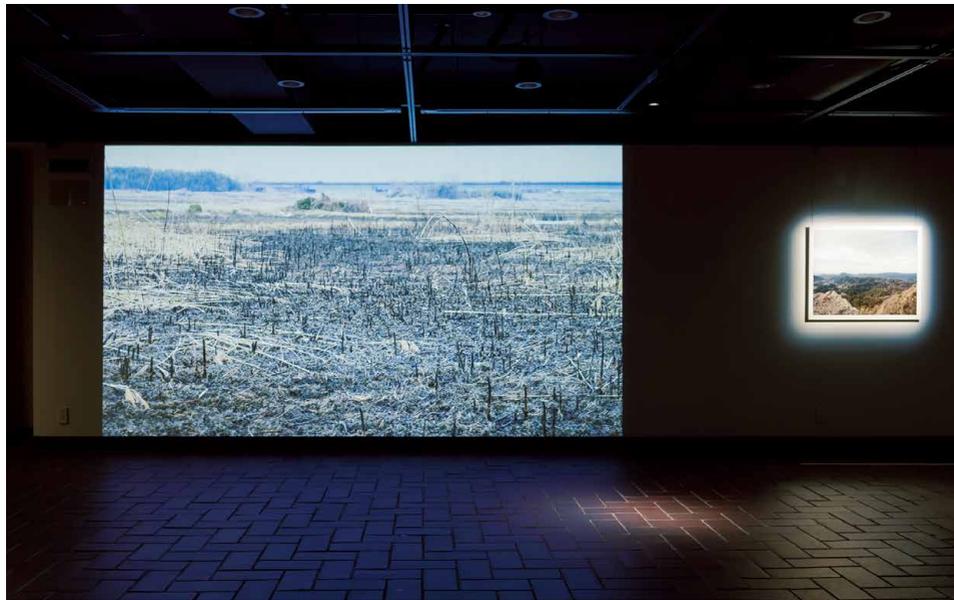
和名	和名	和名
和名みつひと	バックランド美紀	12
1	6	樺
わたしの心は鏡ではないので	Quiet after the snowfall	2023年
2024年	2021年	ファインアートプリント、ハーネミュール紙
スライド映像インスタレーション	ファインアートプリント、ハーネミュール紙	28×21 cm
4分20秒	100×75 cm	13
2	7	馬の鈴草とジャコウアゲハ
わたしの心は鏡ではないので	The day I saw sound	2023年
2023年	2023年	ファインアートプリント、ハーネミュール紙
ファインアートプリント、ハーネミュール紙	ファインアートプリント、ハーネミュール紙	28×21 cm
72.8×89.3 cm	75×100 cm	14
3	8	立葵
わたしの心は鏡ではないので	空気が歌う場所	2023年
2023年	2023年	ファインアートプリント、ハーネミュール紙
ファインアートプリント、ハーネミュール紙	ファインアートプリント、ハーネミュール紙	28×21 cm
72.8×89.3 cm	60×80 cm	15
4	9	エンドウ
わたしの心は鏡ではないので	再生の夢想	2023年
2023年	2023年	ファインアートプリント、ハーネミュール紙
ファインアートプリント、ハーネミュール紙	ファインアートプリント、ハーネミュール紙	28×21 cm
72.8×89.3 cm	40×40 cm	16
5	10	細葉小兜百合
魚は行く、鳥は飛ぶ、	ドクダミ	2023年
彼地の境界に辿り着くことなく	2023年	ファインアートプリント、ハーネミュール紙
2021年	ファインアートプリント、ハーネミュール紙	28×21 cm
スライド映像インスタレーション	28×21 cm	17
3分10秒	11	ランタンキュラス
	アナベルと雨蛙	2023年
	2023年	ファインアートプリント、ハーネミュール紙
	ファインアートプリント、ハーネミュール紙	28×21 cm

和名	和名	和名
吉田さとし	橋本トモコ	向井三郎
18	27	32
数字の練習(2)	隙間の光：葉風	明るい海
2024年	2024年	2024年
糸、綿布	油彩、吸収下地、パネル	木炭、紙
41×31.8 cm	10.9×4.2, 16.6×7.3, 14.6×5.8cm	369×158 cm
19	28	33
その街のスケッチ(3)	隙間の光：Growing Season	鳥
2024年	2024年	2024年
アクリル絵具、綿布	スライド映像インスタレーション	木炭、紙
27.3×41 cm	34秒	210×125 cm
20	29	
その街の地図(5)	川を歩く：ピルスリバー	
2022年	2022年	
糸、綿布	油彩、白亜地、綿布、パネル	
33.3×53 cm	112×145.5 cm	・作品はすべて作家蔵
21	30	
数字の練習(1)	隙間の光：麻生山	
2021年	2024年	
糸、綿布	油彩、白亜地、綿布、パネル	
33.3×53 cm	112×145.5 cm	
22	31	
ネーデルラントの尖塔	隙間の光：岩殿山からの眺め	
2020年	2024年	
アクリル絵具、綿布	油彩、白亜地、綿布、パネル	
50×40 cm	181.8×227.3 cm	
23		
その街の地図(4)		
2021年		
糸、綿布		
33.3×53 cm		
24		
その街の地図(6)		
2023年		
糸、綿布		
45.5×45.5 cm		
25		
給水塔(2)		
2020年		
アクリル絵具、キャンバス		
60.6×41 cm		
26		
その街の欠片		
2024年		
陶、絵葉書		
サイズ可変・28点組		

作品配置図



和田みつひと



左《わたしの心は鏡ではないので》、右《わたしの心は鏡ではないので》

撮影：坂田峰夫



左《わたしの心は鏡ではないので》、中《わたしの心は鏡ではないので》、右《魚は行く、鳥は飛ぶ、彼地の境界に辿り着くことなく》

バックランド美紀



撮影：坂田峰夫



《Quiet after the snowfall》

撮影：坂田峰夫



左から《The day I saw sound》、《空気が歌う場所》、《再生の夢想》



《椿》

吉田さとし

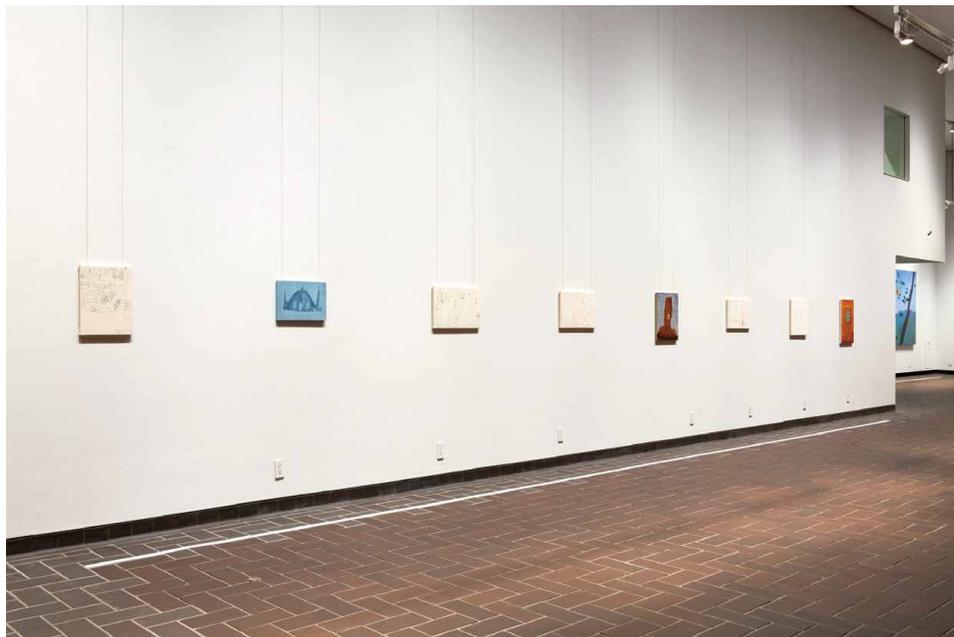


《その街の地図(6)》

撮影：坂田峰夫



《その街の欠片》(部分)



撮影：坂田峰夫

橋本トモコ



左から《隙間の光：葉風》、《隙間の光：Growing Season》、《川を歩く：ヒルスリバー》、《隙間の光：麻生山》、《隙間の光：岩殿山からの眺め》 撮影：坂田峰夫



《隙間の光：葉風》(部分)



《隙間の光：岩殿山からの眺め》

撮影：坂田峰夫

向井三郎



左《明るい海》、右《鳥》

撮影：坂田峰夫



《鳥》(部分)

「回遊する風景」を見て

光田由里 (多摩美術大学教授)

都美セレクションは会場の広さ、観客の層の広さ、アクセシビリティなど、グループ展の場として優れている点が多い。力作がそろい、企画テーマも工夫され、三つの展示の特徴を比較し吟味できるので、見る側にとってもメリットがある。これからも本展への多くの応募を期待したい。

さて、「回遊する風景」展は、三つの展示の最初の会場に位置する。映像作品も含めて、深められ磨かれた絵画展、という印象である。出品作の画面からは、熟慮と創意が積み重ねられた厚い層がうかがわれた。

吉田さとしの連作は、都市風景をテーマとしているが、インテリジェントビル群などが選ばれたのではない。ヨーロッパ旧市街の優しい細部に画家は注目し、絵画を壁面に、ケースに陶器と絵ハガキを組み合わせて、物語が発生した痕跡をなぞる。思えば葉書きとは、美しい言葉だ。

アニメーション映像と隣り合わせにかかっていた橋本トモコの絵画は、色彩豊かに山岳遠景と樹枝近景をくっきり対比交差させる構成である。大画面に沿うように、風で運ばれたらしい木の葉の立体が壁にとめられていた。この葉は、映像の動きをつないで絵へと運ぼうとしたものだろうか。

きわめて縦長の画面に木炭だけで海を描ききった向井三郎の作画態度は特筆される。そこだけ特別な天井高を持つ壁面にピッタリな二幅

は、海に向かい合う画家が水平線を使わないまま、縦位置で海の広大な豊かさを独自に開いた成果である。

人里の植物群、訪ねた山々の風と湿度が動く風景を、和田みつひとはスタイルのライドショーと繊細なプリントで見せた。自然と向かい合い、共存する位置を確かめようとする静かな交歓がある。

17世紀オランダ室内画を思わせるバックランド美紀の密度ある小画面では、静物の澄んだ存在感が結晶化していた。かつての静物画ではモチーフに意味が託されていたのだが、ここではそうではないように見える。どの花、どの果実もそれぞれに時を止めていた。

こうして振り返ると「回遊する風景」展は、植物と山のイメージに満ちてひとけがなく、静かだ。内省的であり、回顧的な視線からくる喪失感さえ滲んでいた。それが企画者の言う「作者の記憶にある風景がそれぞれの心の真ん中を通過し、新たな風景」となったということだろうか。

5名のうち4名が1960年代生まれで、全員が留学など海外滞在経験を持ち、制作を積み重ねてきた。他の二つの展示が意図や状況の説明に溢れていたせいかもしれないが、彼らには言葉で言えないことを美術で表す信念があるのだ、と印象深く感じた。

都美セレクション グループ展 2024
記録集

編集：
東京都美術館

展示記録撮影：
Daisaku OOZU ※明記あるものを除く

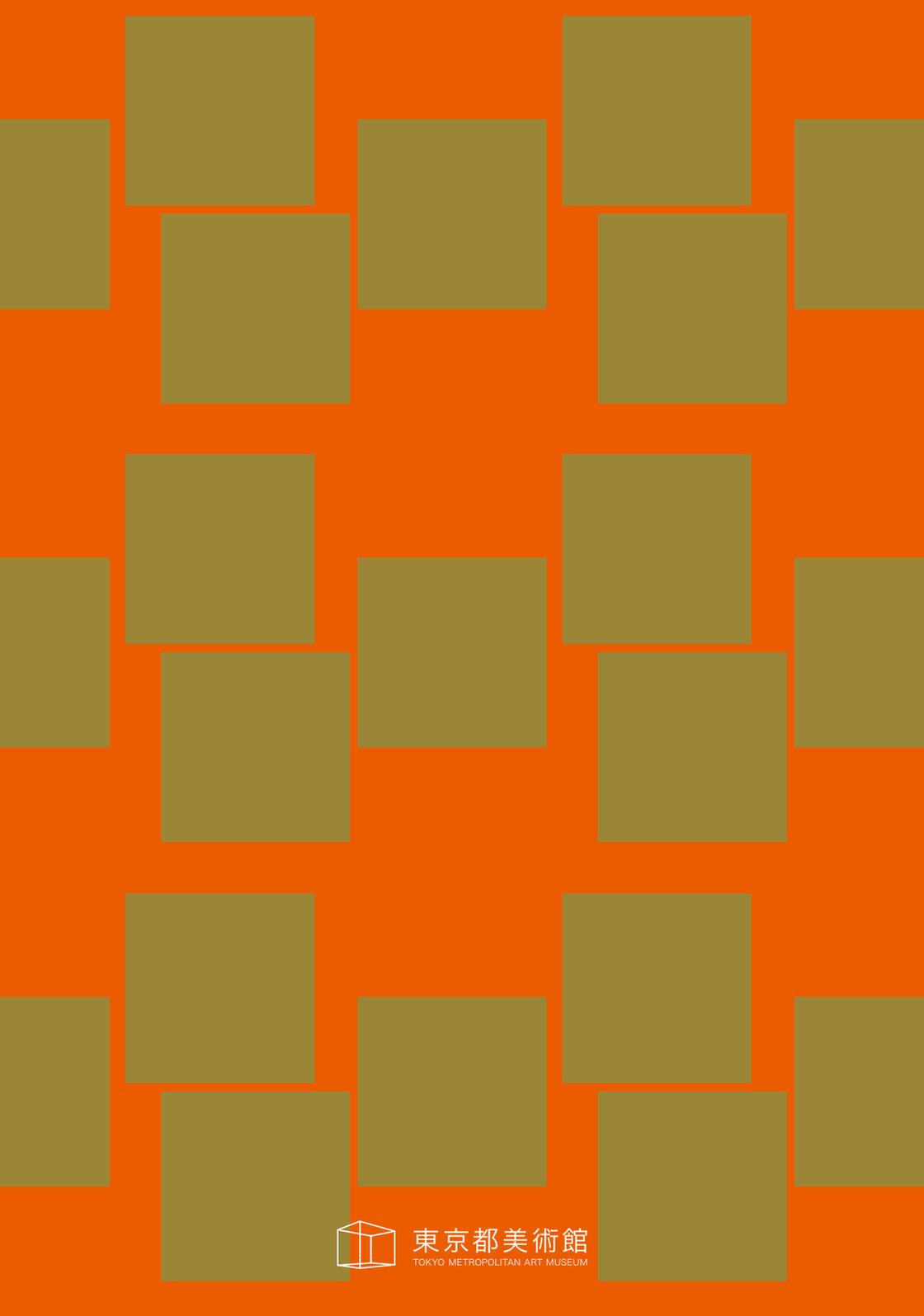
デザイン：
有佐祐樹

印刷：
株式会社アトミ

発行：
公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館
〒110-0007 東京都台東区上野公園8-36
Tel. 03-3823-6921

発行日：
2024年12月25日

©2024 Tokyo Metropolitan Art Museum
Printed in Japan



東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM